

所属 アジア太平洋研究科 博士後期課程 4学年 氏名 島崎裕子

日程 2007年 12月4日 ~ 2007年 12月20日

渡航地（国・都市名）

カンボジア王国：プノンペン特別区ならびにバッタンバン州（Battambang Province）バッタンバン郡（Battambang District）サラカエト行政区（Slaket Commune）、同州内タマコウル郡（Thama Kou District）オータキ行政区（Outaki Commune）

リサーチ目的

カンボジアにおける女性・女児の人身売買は被害当事者・世帯には、「世帯内」「居住地域内」といった個人と社会関係の両面において抑圧的な状況におかれている傾向にある。被害者の「世帯内」では、経済的貧困によって発生する機会の剥奪としての暴力、ジェンダー暴力、子どもに対する暴力が見受けられる。また、「居住地域内」においては、経済的貧困などを理由とした差別や偏見がもたらされ、孤立した状況にある。さらに、農村においては、人身売買からの保護後あるいは移住労働からの帰村後も地域内や世帯内において、偏見に基づく差別により、貧困が再生産し、暴力の連続性が発生することが往々にしてある。つまり、人身売買被害者、またその可能性のある世帯には、多様な要因が重層的に関連し合っているといえよう。これらを踏まえた上で、カンボジア農村で人身売買被害にあう可能性の高い脆弱世帯を対象とし、当事者ならびにその世帯のマクロ・ミクロ双方からの社会構造からの脱却が可能であるかどうか。その検証を目的とした。また、これを検証することにより、アジア地域統合と関連した視点から、特に人身売買対策に関連する協定を結んでいるメコン河流域諸国の農村における脆弱世帯に対する国際機関、行政やNGOの人身売買防止策について提言を行う。

研究課題

カンボジア自然村では、経済的貧困、女性家長世帯といった脆弱世帯を狙った女性・女児の人身売買や、移住労働の過程で世帯構成員が被害を受けたと思われる事例が後を絶たない。その結果、出稼ぎに行った世帯構成員が戻って来ず、より脆弱していく世帯、移住労働あるいは人身売買保護からの帰村後HIV/AIDSを発症し、村内において差別や偏見をもたれ孤立している世帯などが見受けられる。しかし、それら周辺世帯が、弱者が弱者をいたわり、弱者同士、周辺者同士がつながり、ネットワークあるいは、協同した場合、この抑圧システムから脱却し、弱者にとってポジティブな状況を生み出し得る可能性、またそこでの外部NGOの役割を本調査で検証する。

成 果

本調査対象地として、プノンペン特別区とバッタンバン州を選定した。プノンペンでは、カンボジアの人身売買の状況ならびに移住・移動労働の情報収集として、聞き取り調査をUNIFEM(国連女性開発基金)、UNICEF(国連児童基金)、IOM(国際移住機関)、IL0(国際労働機関)、アジア財団等へ行なった。農村調査でバッタンバン州を選定した理由として、いくつかの理由がある。第一に、出稼ぎに出る人の数がカンボジア全土と比較した際に上位に位置する州であるという点である。そのため、出稼ぎに出る世帯の実態と、帰村後の住民自身の状況を調査することが可能である地であるということが第二の理由としてあげられる。第三に、NGOの介入によって、脆弱者同士の連携やグループが存在することから、当事者自身のマクロ・ミクロ双方における社会構造の脱却過程について聞き取り調査が可能であると思われた。以上の理由から当州の現地NGOの協力のもと調査地と決定した。よって、農村調査では、現地NGOであるMeatho Phum K'omah(Home Land)の協力のもと、農村における経済的貧困、女性家長世帯、HIV/AIDS感染者世帯といった脆弱世帯である合計32世帯を対象に聞き取り調査を行った。脆弱世帯の選定は、NGOのプログラムに参加している脆弱世帯、NGOのコミュニティメンバーのネットワークによって収集した情報により、NGOにより選定された。そして、それら農村脆弱世帯調査が、社会構造の脱却から可能であるか、また、当事者が主体的にどのように社会構造か

らの脱却を試みるかを焦点に調査を行った。調査結果からは、人身売買にあう可能性の高い脆弱世帯の社会構造からの脱却に向けて、当事者・世帯構成員にいくつかの内的および社会的変化がもたらされることが、明らかになった。

調査結果による脆弱世帯および当事者の内的および社会的変化の段階として、第一段階目に、世帯内や、コミュニティといった自身が置かれている抑圧的社会構造に気づくことである。この「気づく」ということは、「自分が置かれている状況が当たり前ではない」と認識することである。それは、つまり「自分」を認識することであり、「自分」を「個」として捉えることを意味する。第二段階目は、当事者が置かれている状況に対して、何らかの形で第三者が仲介し、当事者が置かれている状況に対して情報を与えることや、また、それらの状況を援助することなどがあげられる。第三者の存在として、具体的には NGO である場合が大半である。この第一段階と、第二段階の関係性は、非常に密接に関連しあっているため、当事者の第一段階目の内的変化と第三者の介入の順番は前後する場合もある。そして、第三段階目に、第三者の介入によって、同じ境遇にいる人同士の連携が芽生え始める。この時、第三者である NGO が脆弱者同士の連携の場をつくることが必須とされる。第一段階、つまり人権意識が芽生え始めつつある脆弱者自らが集まり、連携の場を作り出すというのは、未だ当事者に対して偏見や孤立といった状況に置かれているために困難が伴う。しかし、第三者という客観的立場にある NGO 存在によって、脆弱者同士が寄り添える場が作り出されることは可能である。脆弱者世帯同士のグループ結成は、心理的に支えあえる場として存在するようになる。今まで居住地域のコミュニティにおいて周辺者は孤立していたために、「自分のような存在は自分だけである」と思っている場合が大半である。しかし、このグループという場を提供されることにより、「自分一人ではない」という心理的変化がもたらされる。また、この脆弱者同士が集まる場というのは、「他者をみるとことによって、自分が見えてくる」とともいえ、第一の内的変化から、より客観的に自分を捉えるようになる。つまり、これは人権意識の獲得ともいえる。第四段階目として、他者を見ることによって、自分自身の意思を確立し始め、社会関係における自分、世帯内における自分をいうものを捉えるようになる。このことは、人権意識の展開ともいえよう。自分自身の意思を明確に捉え始めると、第五段階目として、居住村というコミュニティや世帯内に重層的に重なる問題への認識が深まってくる。これは、「社会関係のなかで自分をどのように位置づけるか」ということでもある。そして、第六段階では、当事者が自分の意思ではどうすることも出来なかった状況から、職業訓練や、経済的自立にむけての可能性を見出すことにより、自信をつけ始めてくる。絶望的であるといった当事者の意識が、微かなる自信をつけることによって、周辺者からの脱却において不可欠なものとなる。自信が芽生え始めることによって、第七段階目である主体的な生き方へと変化し始める。この主体的な生き方はというのは、マクロ・ミクロ双方にあって以前との社会関係との変化をもたらす。つまり、このことは、明日というものさえ、考えることが困難であった当事者たちが、「生きよう」「明日のことを考えよう」といった「生」に対して前向きに捉えるようになるといえよう。

以上が、農村調査結果から明らかになった、脆弱世帯の社会構造からの脱却段階である。つまり、このことは、脆弱者という、自分ではどうすることも出来ない状況におかれている当事者は、あるきっかけ、また、いくつかの段階を経過することによって、既存の社会構造(システム)から脱却することが可能であることを指し示すものといえよう。そして、本調査結果によって明らかになった、人身売買にあう可能性の高い脆弱者・世帯の社会構造からの脱却の可能性は、アジア地域統合にむけて、農村というコミュニティレベルでの人身売買の被害から回避する取り組みとして提案できるのではないだろうか。

＜備考＞ 本調査期間中である 2007 年 12 月 17 日：Pannasastra University of Cambodia にて、ゲストスピーカーとして *Trafficking in persons in Cambodia* と題し講演を行なった。2008 年 1 月 25 日：早稲田大学 グローバル COE 「アジア地域統合のための世界的人材育成拠点」一次世代研究者ワークショップにて、「カンボジア農民の脆弱性～人身売買を事例として～」と題して、発表を行なった。

事業推進担当者確認 (署名・押印)

メイン	黒田 一雄	
サブ	勝間 誠	